
異世界に渡る青年

地獄の傀儡師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に渡る青年

【Nコード】

N0162T

【作者名】

地獄の傀儡師

【あらすじ】

修行を終え、様々な技を会得した青年は光りに包まれ別の世界に行く

これはそんな青年の話である

恋姫の夢小説です。こっちはアニメ沿いになっています。

駄文ですが、面白いと思った人は感想などください

青年光に包まれること（前書き）

傀儡師「何となく書いてみたくなったので書いてみました」

傀儡師「こっちは原作ではなくアニメ沿いです」

青年光に包まれること

青年「飛天御剣流・奥義 天翔龍閃！」

ズバンッ

金持ち「おお！」

青年は現在、依頼で会得した剣術 体術を戦闘マシンを相手に、依頼主の金持ちに見せている

そしてまた戦闘マシンが出現し青年に向かう

青年「倭刀術・絶技 虎伏絶刀勢！」

倭刀を左手で逆手に持ち、地に身体を深く沈ませ戦闘マシンの攻撃を回避し、刀を半回転させてマシンに斬撃を放つ

ズバッ

マシンは真っ二つになり機能停止

青年「これぐらいで、いいですか？」

青年は、倭刀を背中の鞘に入れ金持ちを見る

金持ち「まさか、本当に漫画やアニメの技を会得するとは、正直驚きが止まりませんよ」

青年「努力と、貴方のくれたマシンのおかげですよ」

青年は、笑いながら金持ちにそう言う

金持ち「他に何か、会得は出来たのですか？」

青年「ワンピースの剣術と体術と、るろくに剣心の剣術と体術など、他にも幾つか会得出来ましたよ」

笑顔で、金持ちにそう言うのと更に金持ちは驚いた顔をした

金持ち「まさか本当に、2ヶ月で会得するとは」

青年「では約束通り、金は口座に振り込んでください。それと例の物は？」

金持ち「分かっています。これです」

そう言つと、金持ちは指輪を一つ出し青年に渡す

青年「ありがとうございます。では私はこれで」

青年はそう言い、指輪をはめるとその場から消えた

青年「さて、修行は終わったから今から何をしようかな？」

青年は自室に戻り、考えていると突然目の前が光り出した

青年「何だ！」

そこで青年は、光りに包まれ意識を失った

青年光に包まれること（後書き）

傀儡師「次回はちゃんと本編に入ります」

傀儡師「全部の作品を平行して書いていくので、更新遅れるかもしれませんが」

黒髪 の 山賊狩りと燕人張飛（前書き）

傀儡師「題名の二人と青年は会います」

青年「今回自分の名前が分かるよ」

傀儡師「では楽しんで読んでください」

黒髪の子盗狩りと燕人張飛

青年「ああ、よく寝たっておい！」

俺は、周りを見たら驚いた。何故かと言うと

青年「ここ何処だよ！」

自室にいた筈の俺が何故か森の中にいた

青年「最悪だな。俺はどうやら何らかの転移に巻き込まれたか」

頭を掻きながら、とりあえずまず持ち物を確認

青年「刀は全部差してある。これなら大丈夫か」

刀は全部で四本。小太刀二本に倭刀が一本それと逆刃刀が一本

それと、携帯とデジタル時計と財布にビーフジャーキーが数十袋

青年「それにしても」

再度周りを見てみる

青年「木しかねえな」

周りは全て木しかない

青年「まあ、歩いてればどこかに着くだろ」

そう言い、袋からジャーキーを出し口にくわえて俺は歩き始めた

青年「ああ、全く何処まで森が続いてんだよ」

何処まで歩いてても木しかない

青年「此所はあれか？入り込んだら、二度と出られない迷いの森ってやつなのか？」

などと下らないことを言っていると

？「よう其所の兄ちゃん」

青年「は？」

何かいきなり変な三人組と遭遇した

青年「何だお前等は？言っておくが金は無いぞ」

？「何だ金はねえのか。じゃあその持つてる剣を全部寄越しな！」

？「寄越しやがれ！」

？「寄越すんだな」

三下が、相手の力量も分からねえのか？

青年「嫌だと言ったら？」

？「決まってるだろ。死ね！」

男は俺に剣を振るったが

青年「遅いな」

？「なつ何！」

俺は男の剣を二本の指で止めた。まあいわゆる白刃取りってやつだ

青年「それに、剣の手入れがなってないな。これでは簡単に折れるぞ。こんな風に！」

バキッ

男の剣を目の前でへし折ってやった

？「ひひい！ば化け物だ！」

男達はすぐに何処かに行ってしまった

青年「化け物って、たかが剣折っただけじゃねえか。酷いと思わないか其所の二人？」

俺は近くの茂みにそう言うと、茂みから二人の女の子が出てきた

？「助けようと思ったのだが、必要なかったようだな」

？「お兄ちゃん、指二本で剣を折って凄いのだ！」

一人は綺麗な黒髪の偃月刀を持った女

もう一人は身の丈を越える槍を持った子供

青年（この二人強いな。俺と互角ぐらいか？）

すぐに二人が、只者でないと分かった。この二人から凄い闘気を感じ
るからだ

青年「まあ、とりあえず二人共名前を教えてくださいませんか？」

まずは、名前を聞いておくことにしよう

？「我が名は関羽 字は雲長と申します」

？「鈴々は張飛 字は翼徳なのだ！」

青年「何てこった！」

最近おこる、妙な転移に巻き込まれたと思ったら、目の前には三国の武將の名前を言う女の子二人

どうやら、完全に別世界に来てしまったようだ

関羽「ところで貴方の名は？」

関羽と名乗った子が、俺に聞いてくる

青年「俺か？名前は特にないが呼びたいなら絶影^{ぜっえい}とでも呼んでくれ」

張飛「絶影は、こんなところで何をしてるのだ？」

張飛と名乗った子が俺に尋ねてくる

絶影「ちよつと道に迷っちまってな。そして歩いてたらあの三人に会った」

適当に一応言っておく。未来から転移した何て言ったら面倒だからな

関羽「武器を持っているのを見ると、貴方も武人なのですか？」

絶影「一応な。で二人は一体何をしているんだ？」

関羽「私と鈴々は、虐げられた者達を一人でも多く救う為旅をしているんです」

まだ若いのに、荒れた世の中から人々を守る為に戦う

よほど、何か過去にあったのだろう

絶影「ほう、他人の為に命をかけるか」

何故そこまでしてまで、他人を助けるのかは俺には分からないが

絶影「まあ、せいぜい頑張りな。じゃあな」

関羽「待ってくれ！」

俺は、そう言った後歩き出そうとしたが、関羽に呼び止められた

絶影「何だ？」

関羽「私達と一緒に、戦ってくれないか？」

ほう、見ず知らずの人間にいきなり一緒に戦ってくれとはな

絶影「何故だ？」

関羽「貴方も、私達と同等の力を持っているだろうと思ったからだ。
世の中の為にその力を貸してほしいんだ！」

世の中の為ねえ。まあここで会ったのも何かの縁だな

絶影「俺は気分屋だから、気分が変わるまでなら構わない」

関羽「そうか。ならそれまで宜しく頼む」

張飛「鈴々も宜しくなのだ！」

絶影「ああ宜しくな。ところでさっきから、張飛が別の名前で自分を呼んでいるがどうしてだ？」

気になっていたので、聞いてみた

関羽「絶影殿は、真名を知らないのですか？」

真名？知らねえよそんなもん

絶影「悪いが、俺は他所から来た旅人でな。悪いが説明頼む」

何か、重要そうだから一応説明してもらおう

関羽「分かりました。真名とは・・・」

その後、真名の説明をしてもらい。代々何なのか分かった

絶影「見ず知らずが呼んだら、首をはねられても文句を言えないほど重要ねえ」

果たして、名前何かそこまで重要なのだろうか？

絶影「まあ、分かった。気をつけるようにするよ」

関羽「それと、私の真名は愛紗と言います」

絶影「いいのか？見ず知らずの奴に真名を預けて？」

関羽「暫く、これから一緒に旅をするのですから当然です」

張飛「鈴々も、鈴々って呼んでいいのだ！」

何だ？真名ってそんな簡単に預けていいのか？

まあ、本人が言いって言うてるからいいか

絶影「ああ、改めて宜しくな愛紗に鈴々」

こうして俺は、二人から真名を預かり、特に目的のない旅を開始した

黒髪の山賊狩りと燕人張飛（後書き）

傀儡師「次回の更新は今のところ未定です」

絶影「まあ早めに更新はしますね」

傀儡師「では次回も宜しく願います」

趙雲とハムと会うのこと（前書き）

傀儡師「ようやく更新出来ました」

絶影「まあ見てくれてる人少ないけど楽しんで読んでください」

趙雲とハムと会つのこと

鈴々「ねえねえ絶影、鈴々もそのじゃーきー欲しいのだ」

ジャークーくわえて、いつも通り歩いていると鈴々が欲しいと言ってきた

絶影「なら一つやろう。愛紗もどうだ？」

愛紗「じゃあ、私も一つ」

愛紗と鈴々に、一つずつジャークーを渡し歩く

鈴々「ちよつと堅いけど、美味しいのだ」

愛紗「確かに美味しいが、これは何の肉何だ？」

愛紗が俺に聞いてきた

絶影「牛の肉だよ」

愛紗「ほう、牛肉の燻製とは初めて食べたな」

この世界でも、ジャーキーは割と好評なようだ

まあ、俺の好物の一つだから当然だな

こんな感じで、俺と愛紗に鈴々は暫く歩き街に着いた

門番「ちよつとお待ちを」

三人「？」

何か知らんが、門番に止められた

愛紗「私達に何か？」

愛紗が門番に聞く

門番「間違っていたら申し訳ないが、貴方は黒髪の子供狩りでは？」

黒髪の子盗狩り？何だそれ？通り名か何か？

愛紗「ま、まあそう呼ばれてはいるが、自分でそう名乗ってる訳では」

そうは言っているが、満更でもない顔をしてるな

門番「そうですか。黒髪の子盗の美女とされているので、危うく見逃すところでした。早速主に報告しなければ」

門番はそう言うと、何処かに行ってしまった

愛紗「・・・」

門番の言葉が、けっこう効いてるようだな

絶影「まあ愛紗、気にするな。普通に愛紗は美人だぞ」

嘘ではない。スタイルは抜群で、顔もいいまさしく愛紗は美人と言えると思う

愛紗「・・・ありがとう絶影殿」

愛紗は、まだ落ち込んでいるようだな。・・・暫くすると、門番が戻ってきて客間に案内された

客間で待っていると、二人の女の子が来た

一人は何とも普通で影が薄そうな奴で、もう一人の水色の髪の子は、愛紗達と同じような強い闘気を感じる

二人が、席に座り俺達を見る

？「私はこの街の太守の公孫賛 字を伯珪と言う。隣に座っているのは貴殿等と同じ旅の武芸者で・・・」

？「我が名は趙雲 字は子龍と言う」

なるほど、水色の髪の子は趙雲だから、愛紗達と同じくらいの闘気を感じたのか

そしてもう一人の公孫賛は、実際でもあまり知られていないと思う

から、こんなに普通に影が薄いのか

愛紗「お招きに預かり光栄です。我が名は関羽 字を雲長 こちら
の二人は」

絶影「名前は特にない。呼びたいのなら、絶影とでも呼んでくれ」

鈴々「鈴々なのだ！」

おいおい、鈴々いきなり真名を名乗ってるし

愛紗「こら鈴々！ちゃんと名乗らないと失礼であろう！」

まあ確かに、相手がちゃんと名乗ってるんだから、しっかり名乗らないとな

絶影「どうでもいいが、何故俺達を呼んだんだ？」

とりあえず聞いてみる。まあ恐らく協力が仕官の為だろう

公孫賛「実は、関羽殿の噂を聞いてだな、是非ともうちに仕官して

くれないかと思つてな」

予想通り仕官の話かよ

趙雲「公孫賛殿、それは些か早計ではない」

公孫賛「何故だ趙雲？」

趙雲「噂とは、気付かぬ内に大きくなり大げさになるもの。噂が真実だとは限りません」

確かに、噂が真実とは限らないな

趙雲「そこでどうでしょう。私が関羽殿と手合わせし、真実かどうか確かめるといふのは？」

ほう。戦つて、その武勇が本当かどうか確かめるとはな

公孫賛「私は別に、それでも構わないが」

ハムは了解したか。愛紗は何て言うかな？

愛紗「私は、別に・・・」

趙雲「臆されましたかな？」

愛紗「・・・っ！」

わざと挑発して、手合わせをする気か。はあ、愛紗もそんな安い挑発に反応するなよ

鈴々「臆する訳ないのだ！」

反応する奴がまだいたよ。全く冷静に考えろよ

絶影「まあまあ、鈴々落ち着けって」

鈴々「だって絶影！コイツは愛紗に臆病者って言ってるのだ！」

臆病者もねえ。まあ鈴々ならそう言っか

絶影「安い挑発だ。乗る必要はねえよ」

鈴々「挑発でも腹が立つのだ！」

ああ面倒くさいな。鈴々はこうなると止められないんだよな

趙雲「ほう、挑発に乗るなどは貴殿も臆されましたかな？」

今度は俺に挑発かよ。面倒くさいな

絶影「自分の武に、自身があるのは結構だが、あまり過信しすぎるなよ」

趙雲「ふむ、なら貴殿はそう言えるだけの武があると？」

面倒だ。挑発に乗ってやろう。それに俺は女に嘗められるのは好きじゃない

絶影「なら、愛紗の代わりに俺がお相手しよう」

趙雲「そうですか。では貴殿にお相手願いましょうか」

フッフと笑いながら、趙雲は席を立ち庭に立った

愛紗「絶影殿！大丈夫なのか？趙雲殿は、かなりの腕だと思うが」

愛紗が、一応心配してくれたようだ

絶影「まあ、何とかなるんじゃないの」

そう言っただけは、席を立ち趙雲の目の前に立つ

趙雲「では絶影殿、準備はいいですか？」

趙雲が、自身の武器の竜牙を俺に向ける

絶影「さて、じゃあ俺はこの刀で行く」

俺は、背中の倭刀を抜き趙雲に構える

絶影「おい其所の影が薄いハム！開始の合図を言え」

ハムを見ながらそう言つと

公孫賛「誰が影が薄いハムだ！・・・全くでは始め！」

キーン

ハムが始めと言つた瞬間、趙雲が俺に竜牙を振るってきたので倭刀で受ける

趙雲「ほう、やはり防がれますか」

絶影「かなり速いな。やはり実体は違う。流石は趙雲子龍だな。だが！」

倭刀を振るうと、趙雲も竜牙をぶつけつばぜり合いになった

趙雲「やりますな。だがこの程度ではないのでしょうか？」

絶影「なら一つ見せてやる。」

俺は倭刀に向かい思いきり蹴りをいれ

絶影「倭刀術・蹴撃刀勢しゅうげきとうせい！」

趙雲「なっ！」

蹴りで、斬撃の威力を上げ趙雲を竜牙ごと弾き飛ばした

だが趙雲は、うまく着地し無傷

絶影「流石は趙雲子龍。見事な着地だな」

趙雲「貴殿も流石ですな。さっきの攻撃は予想外でしたよ」

笑いながら、趙雲は俺を見てそう言つと武器を納めた

絶影「何だ？もう終わりか？」

趙雲「ええ、貴殿の実力は分かりましたから」

何だよ。ちょっと殺る気になったのによ

絶影「そうか。なら俺も君の力を認めよう。だが、さっきも言ったが、己の力をあまり過信しないほうがいいぜ」

趙雲「その言葉覚えておきましょう。しかし分かりませんな」

分からない？何がだ？

絶影「何が、分からないんだ？」

趙雲「それほどの武を持ちながら、何故何処にも仕官しないのです？」

何だそんなことかよ

絶影「俺は気ままな奴何でな。気のむくままに生きていき、気が向いたら仕官をする。それが俺だ」

趙雲「フッフ貴殿は、随分な気分屋なのですな」

ハム「えっと、もう私が話してもいいだろうか？」

趙雲と話していると、影が薄いハムが話しかけてきた

絶影「ああ、構わない」

趙雲「では、席に戻りましょうか絶影殿」

俺と趙雲は席に戻る

鈴々「凄かったのだ！絶影ってあんなに強かったのだ？」

席に戻った瞬間、鈴々が俺に言う

絶影「鈴々、とりあえずハムの話を聞きたいから静かにしてくれ」

鈴々「むう、分かったのだ」

鈴々は頬を膨らまし黙りこんだ

愛紗「それで公孫賛殿、仕官以外の話とは？」

公孫賛「実は、最近この辺にいる賊の討伐を手伝ってほしいんだ」

賊の討伐ねえ。まあ暇つぶしにはなるかな？

絶影「賊のアジトは、分かっているのか？」

公孫賛「それが実はまだ・・・」

何だ分かってねえのかよ

趙雲「そのことで、私に策があります」

公孫賛「その策とは、何だ趙雲？」

趙雲「はい。その策とは・・・」

趙雲は策を言い出した。何でも、荷物に紛れてアジトに侵入するら

しい

趙雲「潜入は、私と関羽殿でやりましょう」

賊のアジトに、二人で乗り込むねえ。まあ荷物に紛れて潜入ではそうなるか

鈴々「鈴々も行くのだ!」

しかし、それが納得出来ず鈴々が言う

趙雲「お主では、今回は無理だ」

鈴々「どうしてなのだ!」

鈴々は、何故か分からないのか趙雲に聞く

絶影「そりゃ鈴々は、荷物の中で大人しくする何て出来ないからじゃないのか?」

趙雲の代わりに俺が鈴々に説明する

鈴々「鈴々でも、それぐらい簡単に出来るのだ！」

いや無理だろう

絶影「じゃあ、其所に何も喋らず大人しくしてみる。30分ぐらい、大人しく出来たら一緒に行っていーぞ」

鈴々「分かったのだ！」

鈴々はそう言うと、何も言わずに大人しくなった

絶影「なあ、愛紗」

俺は小声で愛紗に声をかける

愛紗「何です絶影殿？」

絶影「鈴々は、何分くらいもつと思う？」

愛紗「5分が限界だと思います」

愛紗がそう言った瞬間に、鈴々はもう我慢出来なくなったのか、足や手を地面や机にコツコツと当て始めた

そして30秒後

鈴々「はにー」

バタンツ！！

愛紗「鈴々！」

絶影「やれやれだぜ」

鈴々は顔を真っ赤にし、頭から湯気を出し倒れた

まあとりあえず作戦は

愛紗と趙雲は荷物に紛れてアジトに侵入

絶影は荷物の運び人兼侵入者（侵入は、絶影が勝手に決めてる為他の奴は知らない）

鈴々と公孫贄は待機

こんな感じで行うことになった

趙雲とハムと会うのこと（後書き）

傀儡師「次回は賊討伐です」

絶影「ではまた次回」

賊討伐（前書き）

今回は題名の通り賊の討伐です

賊討伐

絶影「ああ、運ぶのだるいな」

現在俺は、愛紗と趙雲が入っている荷物を引っ張りながら、山の中を歩いている

絶影「引っ張るより、蹴飛ばして運ぼう」

そう言った後、荷物を置き蹴ろうとしたが

バタンツ！

愛紗「絶影殿！ちゃんと運んでください！」

直前で、愛紗が勢いよく荷物から出て来て失敗

絶影「面倒だな」

愛紗「面倒でも、やってくれないと困ります」

絶影「分かったから、早く荷物に入れ」

愛紗「くれぐれも、変な運び方をしないでください」

愛紗はそう言っと、荷物の中に戻って行った

絶影「全く、運ぶこつちのみになってくれよ」

愚痴りながら、荷物を運び所定の場所に着いた

絶影「それじゃ、気をつけてな」

愛紗「はい」

趙雲「それでは絶影殿、また後で会いましょう」

二人の言葉を聞いた後、俺はその場を離れた

絶影「さて、俺は俺で賊のアジトに向かうとしよう」

鈴々とハムの所に戻らず、賊のアジトを探す

だが、そう簡単に見つからない。面倒だな

？「おい！其所のお前！」

絶影「何だ？」

何か、人相の悪い奴等が5人俺に話しかけてきた

絶影「お前ら賊だな？」

リーダーらしき男に、話しかける

リーダー「だったら何だ？」

絶影「お前達の、アジトに案内してもらおうか」

そう言った瞬間、俺は小太刀を二本抜き

絶影「御庭番式小太刀二刀流 陰陽撥止」
おんみょうはつし

賊「が！」

小太刀の柄に、小太刀の切っ先をぶつけ賊の一人に飛ばし殺すと

絶影「そろそろ！」

賊に刺さった小太刀を抜き、周りの賊に反撃させる時間を与えず切り殺した

絶影「さて、残ったのはアンタだけだな」

小太刀を、リーダーに向け笑いながら言う

リーダー「た頼む！い命だけは！」

命乞いかよ。下らん

絶影「なら、お前等のアジトに案内しろ。そうすれば助けてやる」

リーダー「わ分かった！ここっちだ！」

リーダーに、小太刀を向けながら俺はリーダーの後に続き歩き出す

暫く歩いていると、洞窟に辿り着いた

リーダー「こ此所だ！この洞窟が俺達のアジトだ」

やっと着いたか。さてと後は・・・

リーダー「お教えたんだから、い命だけ・・・」

リーダーが、全てを言う前に小太刀で斬り捨てた

絶影「案内ご苦労。さて殲滅を開始するかな」

小太刀を鞘に入れ、洞窟に入る。だがいくら歩いても誰とも会わない

絶影「何でアジトなのに、誰もいないんだ？」

いくら歩いても誰もいない。何だ？俺は気付かない間に罠にはまったのか？

暫くさ迷っていると、前方から声が聞こえた

絶影「ようやく、誰かいるみたいだな」

俺は逆刃刀を抜き走る。走って向かうと、すぐに明かりが見え賊は明かりの方向に固まっていた

絶影「日の光か？だが何故あんな所に固まっているんだ？」

少し考えたが、すぐに考えるのをやめ俺は賊の集団に突撃した

絶影「飛天御剣流 龍巢閃」

賊の間を通りながら斬撃を叩き込み進む

賊1「ぐは！」

賊2「な何だ！後ろから！」

動揺している賊を、龍巢閃で次々と倒して行く。固まってくれてい
たおかげで楽に倒せる

気付いたら、周りの賊は全員倒れていた

愛紗「な！絶影殿！」

趙雲「これはこれは、今のは全部絶影殿の仕業ですか？」

目の前を見ると愛紗と趙雲がいた

絶影「ああそうだよ。て言うか、お前達がいたから賊はあんなに固
まってたのか」

さっきの状況に一人納得していると

愛紗「絶影殿！城で待機しててくださいと、言ったでしょう！」

何か愛紗が、凄い形相で近寄ってきた

絶影「イヤー、何となく退屈だったからさ」

愛紗「だからと言って、勝手な行動をしないでください！」

おお怖い。女は怒らせると怖いねえ

趙雲「まあ愛紗、結果的には我々も助かったのだから、良いではないか」

趙雲が笑顔で言う

絶影「まあ、何はともあれ作戦は成功したんだ。とつとと城に戻るうぜ」

愛紗「むう」

趙雲「まあ愛紗、そう膨れっ面でいないで戻るぞ」

俺達はその後歩いて城に帰還した

鈴々「皆！おかえりなのだ！」

絶影「つと！」

何故か鈴々が、お帰りと言いながら俺に抱きついてきた

絶影「何故、俺に抱きつく？」

鈴々「丁度絶影が、目の前にいたからなのだ！」

目の前にいたからって、まあいいか

趙雲& a m p・愛紗「う、羨ましい」

何か愛紗達が言っているが、よく聞こえなかったのでスルー

ハム「全く、全部手柄を持っていく何て」

何故か、凄く落ち込んでいるハムがいた

絶影「何だ？賊は討伐したからよかったじゃないか」

ハム「うゝ、私の白馬に乗って颯爽と敵を倒すという予定が」

何言ってんだか

絶影「まあハム、そう言うな。賊は始末したんだからよ」

公孫賛「くゝ私の活躍が」

こりゃ駄目だな。まあ明日になれば普段通りに戻っていると思うがな

そして次の日、俺達は公孫賛に別れを告げ城を後にしたのだが

絶影「何故お前が一緒にいる？」

趙雲「別に、私が一緒にいても良いではないか」

何故か趙雲も一緒についてきていた

絶影「いいのか？ハムの所にいなくて？」

趙雲「公孫賛殿の所にいるより、貴殿達と一緒にいたほうが楽しそうなのでな」

趙雲は笑いながらそう言う

絶影「その考えは共感出来る。ハムの所にいても、つまらなそうだからな」

実際に、あまり面白くなかったからな

趙雲「それと、私の真名は星です」

絶影「いいのか？まだ会って間もないのに」

星「これから、一緒に旅をするのですからよいのですよ」

毎回思うが、そんな簡単に許していいのだろうか？

そんなこんなで、また俺達は旅に出た

賊討伐（後書き）

次回は本編かオリキャラ紹介です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162t/>

異世界に渡る青年

2011年8月7日05時14分発行